

岡本太郎の

完全版

一つの恋の
ようなものだった

沖縄
ドキュメンタリー映画

痛切なる

島は小さくてもここは日本、
いや世界の中心だという
人間的プライドをもつて、
豊かに生き抜いてほしいのだ。
沖縄の心の
永遠のふくらみとともに……

生命のやさしさ

沖縄とは、私にとって一つの恋のようなものだった —岡本太郎

日本を代表する芸術家・岡本太郎(1911-1996)は、1959年と1966年、「沖縄」に旅をした。きっかけは、日本人としてのアイデンティティを探し求めて、日本再発見の旅に出たこと。その旅の、いちばん最後にぶつかったのが「沖縄」だった。彼の究めたかったものとは、日本人とは何か?自分自身とは何か?の答えを求めることだった。60年以上前の沖縄の旅で太郎が捉えたものとは、素っ裸で生きる人々の「痛切な生命(いのち)のやさしさ」だったという。

もう一度、太郎と一緒に沖縄を彷徨う旅に出る。

そして岡本太郎は、ある結論を導き出す。

「沖縄の中にもこそ、失われた日本がある」

「沖縄ではじめて、私は自分自身を再発見した」

岡本太郎は、自ら沖縄へ溶け込み、そして沖縄で自分自身と出逢ったのだ。

それほどまでに恋した太郎の沖縄とは、一体何だったのか?

「岡本太郎の沖縄」は、今の私たちに何を投げかけ、そしてどうつながるのか?

それを確かめにもう一度、「岡本太郎の沖縄」を旅するドキュメンタリー映画である。

本作は、前作から取材を重ねながら、更に数年かけて、再構成・再編集した「ドキュメンタリー映画 岡本太郎の沖縄(完全版)」である。



岡本太郎

Taro OKAMOTO

芸術家。1911年生まれ。29年に渡仏し、「アブストラクション・クレアシオン(抽象・創造)協会」に参加するなど30年代のバリで前衛芸術運動に参画。パリ大学でマルセル・モース

に民族学を学び、ジョルジュ・バタイユらと活動をとにした。40年帰国。戦後日本で前衛芸術運動を展開し、問題作を次々と社会に送り出す。51年に縄文土器と遭遇し、翌年「縄文土器論」を発表。50年代後半には日本各地を取材し、数多くの写真と論考を残した。70年大阪万博のテーマプロデューサーに就任。太陽の塔を制作し、国民的存在になる。96年に没した後も、若い世代に大きな影響を与えている。



監督・製作・編集: 葛山喜久 語り: 井浦新 企画: 杞憂ティダ 原案: タゴシ道遥 構成: 葛山喜久 撮影: 山崎裕 中村夏葉
プロデューサー: 新里一樹 製作: シンプルモンク・沖縄テレビ開発・岡本太郎記念現代芸術振興財団 企画・配給: シンプルモンク
制作年: 2022年 制作国: 日本 DCP ©2022 シンプルモンク/岡本太郎の沖縄製作委員会 協賛: キヤノンマーケティングジャパン
Mr.KINJO オリックスレンタカー



助成: 文化庁文化芸術振興費補助金

